

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## An Analysis of the Constraints on the Use of the Adverb *tada* in Dialog : Based on the Corpus of Japanese Native Speakers and JSL Learners

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 靖代, 布施, 悠子, SUZUKI, Yasuyo, FUSE, Yuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003513">https://doi.org/10.15084/00003513</a>

## 対話場面における副詞「ただ」使用上の制約の分析

——母語話者と学習者のコーパスデータを比較して——

鈴木靖代<sup>a</sup>      布施悠子<sup>b</sup>

<sup>a</sup> 国立国語研究所 共同研究員

<sup>b</sup> 国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 非常勤研究員

### 要旨

本稿は、副詞「ただ」の対話場面における使用上の制約を明らかにすることを目的として、母語話者のコーパスデータ、および評価データとして比較を行う学習者のコーパスデータ、の2つのデータを用いて分析を行った。それらの分析の結果、母語話者の対話場面における副詞「ただ」の使用に際して推察されたことは以下の通りである。①「ただ」の副詞としての使用は少ない。②動詞をとりたてる傾向が強い。③動詞をとりたてる際には、限定副詞類の「単に」「単純に」「ひたすら」や、副助詞「だけ」と共起する傾向がある。④比較表現やとりたてる範囲（範列的關係にある範囲）の限定を否定する表現も共起することがある。⑤「ただNだ」のような形の名詞述語文は不自然に感じられやすい。⑥名詞をとりたてる使用は不自然に感じられやすい。⑦必要な表現との共起のない動詞を取り立てる使用は不自然に感じられやすい\*。

キーワード：限定副詞、副助詞、学習者コーパス、I-JAS、B-JAS

### 1. はじめに

本稿では、副詞「ただ」の対話場面における使用上の制約について分析を行う。筆者らが副詞「ただ」の研究に興味を抱いたのは、中国語を母語とする日本語学習者（以下「中国人学習者」と呼ぶ）の、縦断コーパス（『北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)』<sup>1</sup>）の対話データを見たことがきっかけである。そのデータを見ると、「最後の大学入学試験はただ108点取りました。（「108点しか取れませんでした。」の意）、「ただ夏休みと冬休みの時、家に帰ります。（「夏休みと冬休みの時だけ、家に帰ります。 / 夏休みと冬休みの時しか、家に帰りません。」の意）」のように、限定を表す場面において副詞「ただ」を用いた不自然な表現が多く見られた<sup>2</sup>。

中国人学習者の副詞「ただ」の使用については、日本語と中国語の対照研究の観点では、丁(2010)が、日中の排他的限定副詞の異同について研究を行い、副詞「ただ」と限定を表す中国語「只」が語義ではほぼ共通していることを指摘している。よって、中国人学習者は、限定を表す場面で

\* 謝辞：本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（プロジェクトリーダー：石黒圭）、JSPS 科研費 JP18K00731（研究代表者：布施悠子）の成果である。本研究は、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS』（および検索システム）を利用して行ったものである。また、2019年度「中国語話者のための日本語教育研究」第46回研究会の発表資料（鈴木2019）を加筆・修正したものである。

<sup>1</sup> 現在、国立国語研究所日本語教育研究領域、北京外国語大学北京日本学研究中心、北京師範大学外国語文学学院の三者が連携して構築中の学習者縦断コーパス。

<sup>2</sup> 2つの文について日本語母語話者10名（日本語・日本語教育研究の大学院修士課程・博士課程を修了した日本語母語話者6名、一般日本語母語話者4名）に確認したところ、全員が「不自然」と回答した。

「只」の代わりに「ただ」を用い、それによって不自然な使用が生まれている可能性が高いことが推察される。

しかし、一方で、これまでの先行研究では、副詞「ただ」の対話場面における使用の制約について十分明らかにされているとは言えないため、上記のような中国人学習者の使用をなぜ母語話者が不自然と感じるのかについて説明することが困難である。よって、本研究では、副詞「ただ」の対話場面における使用上の制約を明らかにすることを目的とする。本稿で言う「使用上の制約」とは、使用の際にその制約に抵触すると、母語話者が「不自然」だと感じる、ということの意味するものとする。分析には、2つのコーパスデータを用いる。まず、母語話者の対話場面における実際の使用について分析するために、母語話者のコーパスデータを用いる。次に、比較のための材料として、母語話者による評価を付加した学習者のコーパスデータを利用する。

なお、「ただ」という語は、文法的に多様な機能を果たす点が特徴と言える。品詞的観点からは名詞、副詞、連体詞、接続詞として働く（相澤・佐藤 2008）が、本稿においては、副詞として働く「ただ」のみを分析することとする。

## 2. 副詞「ただ」についての先行研究

副詞「ただ」についての先行研究は非常に少ないが、先行研究によれば、副詞「ただ」は以下のようにまとめることができると言える。まず、品詞分類上は、「だけ」「ばかり」「しか」といった副助詞と同様の機能を果たす限定副詞と認められる（工藤 2016）。また、基本的意味としては、「副助詞のダケ・ノミ・バカリ・シカなどに対応するもので、範列語群との対立関係の中で、その語句ダケと範囲を限定し、その他を排除する」（工藤 2016）とされている。

加えて、使用の制約としては、まず、工藤（2000）で「ただ」は、ほぼ叙述文専用であるが、命令・依頼文にも使用可能であると思われることが述べられている。また、安部（2004）では、「ただ」は限定を表す助詞と共起する例は多く見られるものの共起は必須ではないこと、その範囲の限定を否定する「ない」、マイナスの意味を表す「～に過ぎない」、「～というよりも」「むしろ」のような比較表現、との共起傾向も見られることが指摘されている。

さらに、呉（2019）においては以下の点が使用の制約として指摘されている。①「好きという気持ちはなく、ただ仲がいいだけだ。」のように、特に形容詞・形容動詞をとりたてる場合、文末に「だけだ」を要求する傾向がある。②「彼はただぼんやりと見ていない」のように、「ただ」は基本的な否定ができない。③「婚姻届けなんてただ紙だ」のような名詞述語文には使えない。その場合、連体詞「ただの」に変える必要がある。④圧倒的に動詞述語文が多い。

しかし、これまでの研究においては、分析に用いる文例が小説からの引用が多く、現代日本語話者の実際の対話における使用においては違和感を覚える可能性もあると思われる。例えば、工藤（2016）においては、

「私は何千万とゐる日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。（夏目漱石『こころ』）」

といった、1900年代初頭の小説からの引用が中心である。また、多くの先行研究にある論文執筆による作例は、前後の文脈が省略されており、実際の使用が明らかにされているとは言えないと思われる。よって、コーパスを用いた、実際の対話場面における使用に即した分析を行うことには一定の意義があると考えられる。

### 3. 分析方法

#### 3.1 分析対象

本研究は、以下2つのコーパスを利用して分析を行う。

- ① 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language : I-JAS)』 (以下 I-JAS と呼ぶ)

まず、母語話者の副詞「ただ」の使用の実態について分析を行うためにこのコーパスを利用する。I-JAS は、12の異なる母語を持つ海外の日本語学習者、および国内の教室環境・自然環境の日本語学習者と日本語母語話者の発話データと作文データを横断的に収集したコーパスである。学習者1,000名、日本語母語話者50名のデータが公開されている。

本研究においては、日本語母語話者の、副詞「ただ」の使用傾向を分析するために、このI-JASの第1次・2次データにおける50名の日本語母語話者の対話データを用いた。

- ② 『北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)』 (以下 B-JAS と呼ぶ)

次に、母語話者の、副詞「ただ」の使用上の制約についての評価データを得るための材料として、B-JASを利用する。B-JASは、中国・北京の大学(日本語学科)の17名の学生を対象に、継続的に発話データと作文データを収集している縦断コーパスである。発話データは、計8回継続的に調査を行っている。また、このB-JASの発話データはI-JASに準拠して構築されており、調査項目はI-JAS同様である。

本研究においては、B-JASの計8回分の対話データを用いた。

#### 3.2 分析方法

I-JAS データ分析の手順は以下の通りである。まず、対話データから「ただ」を検索した後、副詞「ただ」が現れた箇所を1つ1つ目視にて抽出し、「ただ」がとりたてている部分の品詞、および共起語について分析を行った。

B-JAS データ分析については、まず、対話データから「ただ」を検索した後、副詞「ただ」が現れた箇所を1つ1つ目視にて抽出し、副詞「ただ」が現れた文を必要に応じ前後の文を含め日本語母語話者4名<sup>3</sup>に提示した。そして、①自然な使用か否か判定する、②不自然であれば不自然な部分を自然な表現に直す、という作業をそれぞれ行った。なお、「ただ」とは無関係な部分の不自然さについては「ただ」の使用のみに注目するようにして行った。例えば、「ただ麺をだ

<sup>3</sup> 4名の日本語母語話者の属性は、日本語・日本語教育研究の大学院修士課程を修了1名、同博士課程を修了1名、日本語以外を専攻する大学生1名、一般母語話者1名である。

け食べます」という発話の助詞「を」は不自然であるが、そこには注目せず、「ただ」の使用だけに注目するようにした。そして最後に①②の手順を終えたデータについて、筆者が、「ただ」がとりたてている部分の品詞、および共起表現について分析を行った。

なお、「共起」について本稿では「ただ」と直接関係があると思われるものと、「ただ」と間接的な関係にあると思われるものの双方を「共起」として扱うものとするが、必要に応じその下位分類として前者を「呼応関係」、後者を「共存関係」として記す。加えて、とりたてている部分の品詞についてであるが、本稿では、とりたてられている語や句の中心となる品詞を分析した。語がとりたてられている場合、例えば「ただ聞いた」は語幹である動詞「聞い」をとりたてていると見なした。また、句がとりたてられている場合には、例えば「ただ文句を言ってるだけです」は動詞「言っ」をとりたてているとした。

#### 4. 分析結果と考察

本節においては、まず I-JAS データを用いたデータの分析結果を示し、続いて B-JAS データの分析結果を示す。

##### 4.1 母語話者の副詞「ただ」使用の実態

ここでは、対話場面において母語話者はどのように副詞「ただ」を使用しているのかを概観するために、I-JAS データを分析した結果を示す。I-JAS において出現した、日本語母語話者の「ただ」という語の使用の出現は全 99 例あった。そのうち最も出現の多かった品詞である接続詞は 75 例 (75.76%) あり、副詞「ただ」の出現は 16 例 (16.16%) であった。

次に、副詞「ただ」がとりたてている品詞はどんな品詞が多いのかについて分析を行ったところ、出現した全 16 例のうち 13 例 (81.25%) を、動詞をとりたてているものが占める結果となった。次いで名詞 2 例 (12.50%)、形容動詞 1 例 (6.25%) となった。

さらに、共起について分析し、その傾向についてまとめた結果を以下の表 1 に示す。

表1 共起の種類別出現数

「ただ」との関係	共起の種類	共起表現	出現数	計 <sup>4</sup>
呼応関係	限定副詞類	単に	3	6
		単純に	2	
		ひたすら	1	
	副助詞	だけ	5	5
	とりたてる範囲の限定の否定	ない	1	1
共存関係	比較表現	～方	1	4
		それとも	1	
		～より	2	
	範列的關係にある範囲の限定の否定	ない	1	1
	モダリティ表現	たい	1	2
		てしまう	1	
助数詞	～人	1	1	

分析の結果、共起の種類という観点では、限定副詞やそれに準じる表現が6例と最も多いという結果となった。限定副詞が共起する傾向があることについては、先行研究にはあまり指摘されておらず興味深い結果となった。共起していた限定副詞を細かく見ると、「単に」が3例と最も多く、次いで「単に」と意味的に近似している「単純に」が2例、また、限定副詞「ひたすら」が1例あった。工藤（2016）では、限定副詞として「ただ、特に、むしろ、ひたすら、単に、まさに、主に、例えば、まして、少なくとも」等が挙げられているが、母語話者が副詞「ただ」に共起させているのは、これらの中では「単に」「ひたすら」の2つであった。また、「単に」と意味的に近似している「単純に」の出現が見られたことも興味深い結果となった。以下がそれぞれの実例の出現例である<sup>5</sup>。

- (1) その、<sup>6</sup>次とかにやっぱりヨーロッパってゆうのはただ単にその見たい物とゆうかその、ね風光明媚とゆうかなんかそういうところがあるってゆうんでそれは行ってみたいなってゆうのはありますね (JJJ35)<sup>7</sup>
- (2) えっとただ単にえと文句を言ってるだけの話です {笑} (JJJ54)
- (3) ただ単にほんとなんかあの、今日も学校行かなきゃいけないからむかつくぜとか (JJJ54)
- (4) 理由は今はもうただ単純に時間が足りないなーっていうふうに思う時がすごく多いので (JJJ51)
- (5) あー、ま田舎がいいというよりかは、ただ単純に地元が好きなので (JJJ51)
- (6) でー、ただひたすら長所を伸ばすってゆう方がー合理的じゃないですか (JJJ23)

限定副詞が共起している際に特徴的だったのは、(1)～(6)を見てもわかるように、「ただ+

<sup>4</sup> 1つの「ただ」に2つの種類の共起をともなっていたものもあるため、総数が16を超える。

<sup>5</sup> 例文は、同じ箇所からの引用であっても、注目している共起の種類等が異なれば、別の例文として異なる番号（通し番号）を付けた。

<sup>6</sup> 「,」は会話中のポーズを表す。以下同様。

<sup>7</sup> ( ) の中には調査協力者のIDを表している。以下同様。



限定副詞」の形で出現していたことである。これは6例全てに共通していた。このように、出現した限定副詞は全て「ただ」の直後に置かれて共起していること、また「ただ」も限定副詞に分類されることから、「ただ」と限定副詞は一定の呼応関係にあることが推察される。また、6例中5例までは動詞をとりたてていた。

この「ただ+限定副詞」の形についてであるが、呉(2019)では、「初めて恋人と手を繋いだ。ただただ嬉しかった。」を例に出し、「ただただ」は範列的關係にあるものはなく、当該要素そのものを強調し「とても」のようなニュアンスを持つ「ただ」のもう1つの用法であることが述べられている。しかし、本分析では「ただ+限定副詞」の形の出現が多く見られたため、「ただただ」は「ただ」の持つもう1つの用法というよりも、「ただ+限定副詞」という共起の中の一つの形である可能性が推察される。この「ただ+限定副詞」の形の共起についてはさらにデータ数を増やして今後さらに詳しく分析を行う必要があると思われる。

また、1例のみの出現ではあるが、(2)では、限定副詞「単に」と副助詞「だけ」の両方と共起していた。

限定副詞の次に共起が多かったのは副助詞で5例であった。以下に実際の出現例を示す。

- (7) あのーまあ別にただみんな集まってっていう会になるだけだけど (JJJ43)
- (8) あの流れに負けまいと待機してるやつを手でつかまえる で、ただつかまえるだけなんですけどね (JJJ50)
- (9) もうボールがあればそこただ追いかけるだけという感じで (JJJ35)
- (10) ほんとにただ愚痴をゆってるだけなんです (JJJ54)
- (11) えっとただ単にえと文句を言ってるだけの話です [笑] (JJJ54)

先行研究に共起傾向があるとされたのは限定を表す副助詞であったが、実際に出現が見られた副助詞は上記の例のように「だけ」のみであり、「しか」「ばかり」といった他の限定を表す副助詞は見られなかった。また、5例全てにおいて、動詞をとりたてていた。

この副助詞についてであるが、工藤(2016)では、「ただ」は「副助詞のダケ・ノミ・バカリ・シカなどに対応するもの」として対応関係にあることが指摘されており、本分析に出現した「だけ」5例においても、とりたてる語の直後に置かれて共起している。よって、副助詞「だけ」は「ただ」と直接的関係がある呼応関係にあると思われる。

次に多かったのは比較表現の共起で、4例見られた。以下が実際の出現である。

- (12) でー、ただひたすら長所を伸ばすってゆう方がー合理的じゃないですか (JJJ23)
- (13) 俯瞰で見ればいいのかそれとも、ただ自分の能力を上げればいいのかってゆうその模索している姿 (JJJ35)
- (14) もうあのこの壁に穴を開けてしまったのでそれをただ埋めるよりは、もうじゃあ全部きちんと直してしまおうということで (JJJ57)
- (15) あー、ま田舎がいいというよりかは、ただ単純に地元が好きなので (JJJ51)

先行研究に共起傾向があるとされた比較表現であるが、様々な比較を表す表現での出現が見られた。また、3例が動詞をとりたてていて、1例は形容動詞をとりたてていた。これらの比較表現は「ただ」がとりたてている語の直後に置かれることもあれば、「ただ」より前に出現しているものもあり、出現形式が一定ではない。よって比較表現は「ただ」と呼応関係にあるというよりは間接的関係にある共存関係にあたると思われる。

次いで2例が見られたのは、範囲の限定の否定「ない」である。実際の出現は以下の通りである。

- (16) だけどとってもときめく物ってゆうかだこれは大好きなただ着る機会がないの。(JJJ47)  
 (17) あのおんまりあの人に祝ってもらってもなくてただ過ぎてしまうこともあるんですけど (JJJ44)

(16) は「ない」と共起していて、とりたてる範囲（着る機会）を限定した上で、それを否定している。この形の否定「ない」の共起については先行研究にも共起する傾向があることが指摘されており、また、「ない」が「ただ」でとりたてる範囲の直後に置かれており「ただ」との関係が明白であるため、「ただ」と呼応関係にあると思われる。一方、(17) では「ただ」でとりたてる範囲（過ぎてしまう）と範列的關係にある範囲（人に祝ってもらう）をあらかじめ明示し、その限定を事前に否定している。この(17)のような、範列的關係にある範囲をあらかじめ明示して限定し、それを事前に否定するという形の共起については先行研究に指摘がない。これは、本研究が「対話場面」を分析しているということと深く関係していると思われる。対話場面においては、聞き手が連想するであろう範列的關係にある範囲を話し手が明示的に限定し、あらかじめその範囲の限定を否定しておいて、その後改めて「ただ」でとりたてる範囲を限定していると言える。この形での「ない」の共起は、「ただ」より前に出現していること、さらに「ただ」でとりたてる範囲そのものの否定ではなく範列的關係にある範囲の否定であるため、「ただ」と呼応関係というより間接的関係にある共存関係にあると推察される。

さらに、2例の出現が見られたのは、話し手の心的態度が表されるモダリティがとりたてる語に付加する形で共起されている例である。

- (18) あのおんまりあの人に祝ってもらってもなくてただ過ぎてしまうこともあるんですけど (JJJ44)  
 (19) その、次とかにやっぱりヨーロッパってゆうのはただ単にその見たい物とゆうかその、ね風光明媚とゆうかなんかそういうところがあるってゆうんでそれは行ってみたいなってゆうのはありますね (JJJ35)

(18) では、「てしまう」という、話し手の残念な気持ちを表す心的態度が表されるモダリティ表現が、とりたてる語「過ぎ」に付加する形で共起されている。(19) でも、「見たい」と、願望を表すモダリティ表現「たい」がとりたてる語「見」に付加する形で共起されている。モダリティ表現については、工藤（2000）では、「ただ」は、ほぼ叙述文専用と言っているが「命令・依頼



文にも使用可能かと思われる」と述べられている。よって、「ただ」と共起する傾向のあるモダリティ表現があることが示唆される。

最後に1例のみ出現が見られたのは「助数詞」の共起である。以下が実際の出現である。

- (20) まあユリウスカエサルはまあなんかやっぱりそのローマの中でただ一人の創造的天才って言われている人で (JJJ04)

(20) では「～人」という助数詞が共起されている。(18) (19) の願望を表す「たい」や残念な気持ちを表す「てしまう」のようなモダリティ表現と「～人」のような助数詞の2つの表現の共起傾向については、先行研究に指摘されておらず、興味深い結果であるが、データ数が少ないため、さらに分析を行う必要があると思われる。また、これらの共起は「ただ」と呼応関係にあるというほどの強い結びつきがあるとまでは言えず、あくまでも間接的關係にある共存関係にあたりと推察される。

なお、全16例の出現のあった「ただ」において、限定副詞や副助詞、比較表現、とりたてる範囲の限定の否定、範列的關係にある範囲の限定の否定、とりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティ表現、助数詞といった共起のない使用、例えば、「ただこれを食べます」や「ただ寝ました」といった形での使用は見られなかった。

以上、母語話者の対話場面における副詞「ただ」の実際の使用について分析を行った結果をまとめると、①「ただ」の副詞としての使用は少ない、②動詞がとりたてられる傾向が強い、③動詞がとりたてられる際には、限定副詞類の「単に」「単純に」「ひたすら」や、副助詞「だけ」と共起する傾向がある、④副助詞は「だけ」を除き共起しにくい、⑤比較表現やとりたてる範囲（範列的關係にある範囲）の限定の否定の表現も共起する傾向があることが明らかになった。しかし、「使用の制約」という観点においてはこのデータのみでは十分な説明ができるとは言えない。よって、次に、学習者コーパスを用いた母語話者の評価データを分析することで副詞「ただ」の対話場面における「使用の制約」についてさらに詳しく分析を行う。

#### 4.2 母語話者4名全員が「不自然」と感じた「ただ」

ここでは、B-JASデータを「ただ」の自然さを測る評価対象として母語話者4名に示し、その結果、全員が「不自然」と判定したものについて、まず学習者のレベル別に分析した結果を示す。続いて、「不自然」と判定された出現について、とりたてられている品詞、および共起表現について分析を行った結果を示す。母語話者4名全員が一致して「不自然」と判定するということは、「使用の制約」に抵触していることが原因と思われるためである。なお、共起の分析については、I-JASデータ分析結果に基づき、限定副詞、副助詞、比較表現、とりたてる範囲の限定の否定、範列的關係にある範囲の限定の否定、「～たい」「～てしまう」のようなとりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティ、「～人」等の助数詞について分析を行った。分析の結果、出現した副詞「ただ」全113例のうち、4名全員が「不自然」と判定したものは、69例(61.06%)であった。その内訳は以下表2, 3の通りである。

表2 学習者全体のレベル別使用

	1年次	2年次	3年次	4年次	計
J-CAT 平均点 <sup>8</sup>	134.4 中級前半	191.8 中級	224.8 中級後半	263.1 上級前半	
不自然な使用と判定された数	7	15	26	21	69
総出現数	12	30	35	36	113
不自然な使用と判定された割合	58.33%	50.00%	74.29%	58.33%	61.06%

まず、表2は母語話者に「不自然」と判定された学習者全体の「ただ」の使用を、レベル別に分析したものである。これを見ると、学習者のレベルが上がっても「不自然」と判定された使用の出現が減ることはなく、むしろ3年次には出現が増加し、不自然な使用と判定された割合も上昇している。このことにより、学習者はレベルが上がっても「ただ」使用の制約について認識していないために不自然な使用を引き起こしていることが推察される。加えて、判定している母語話者においても学習者の日本語レベルが低いために発話の意味がわからないといった原因で「ただ」の使用を「不自然」と感じているのではなく、「ただ」との共起の有無といった使用の制約の面から判定を行っていることがわかる。

表3 判定者全員が「不自然」と感じた副詞「ただ」

とりたてている品詞	全出現数	不自然と判定された数
名詞	89	63 (70.79%)
動詞	23	5 (21.74%)
形容詞	1	1 (100.00%)
計	113	69 (61.06%)

続いて、「不自然」と判定された使用について品詞別に分析した表3を見ると、母語話者4名全員が「不自然」と判定した69例のうち名詞をとりたてているものが63例(91.30%)と最も多かった。また、副詞「ただ」全出現113例のうち、名詞をとりたてているものは89例あったが、そのうちの63例、つまり70.79%が「不自然」と判定されていることになる。これは、4.1において母語話者が「ただ」でとりたてていたのは主に動詞であった、という結果と関係していると思われる。つまり、母語話者が「ただ」でとりたてているのは主に動詞であるため、それ以外の品詞をとりたてている場合に「使用の制約」を強く意識する可能性があることが推察される。

では、動詞以外の品詞をとりたてる際に母語話者が「不自然」と感じやすい使用はどのような場合なのであろうか。まず名詞をとりたてているもので「不自然」と判定された63例を分析する。その結果、63例中13例に助数詞の共起が見られた。以下が実際の出現例である<sup>9</sup>。

- (21) 大学で選ん選んだ授業は週ただ一回は朝から授業があります (CCB17 第5回調査)  
 (22) 最後の大学入学試験はただ百百, 八点取りました (CCB13 第6回調査)

<sup>8</sup> J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は日本語能力の判定をインターネット上で実施するテストである。

<sup>9</sup> 学習者の発話についてはフィラーが非常に多く読みにくくなるため、フィラーは表記しなかった。

- (23) パーティー行える機会があつた少ないです よんねんかん私は四年間武漢にいたんですけど  
 そのようなパーティーはただ一回二回行って、いたんです (CCB18 第 8 回調査)

4.1 では、母語話者が助数詞「人」を共起させて名詞をとりたてている (20) のような例が見られたことを指摘したが、(21) ~ (23) の例を見てもわかるように、たとえ助数詞と共起していても、「不自然」と感じるものがあることがわかる。しかし、出現した 13 例に「人」を共起していたものはなかったため、助数詞の種類によって制約があるのかどうかは明らかにできなかった。また、63 例中 50 例は、限定副詞、副助詞、比較表現、とりたてる範囲の限定の否定、範疇的關係にある範囲の限定の否定、とりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティ、助数詞、等の共起が見られなかった。それらの実際の出現例を以下に示す。

- (24) 小学校の時、ずっと、自分の世界に、自分の世界で自分、ただ自分のことを考えて一、自分は毎日、本、本と、漫画などを読む、とても楽しいです (CCB17 第 4 回調査)
- (25) みんなが生まれた頃は地位もお金も家族も全然異なっていますけどただお金ただ時間はみんなにとっては公平なことです (CCB14 第 8 回調査)
- (26) 最初はただ北京と上海がありますけどでも今はなんか全国で流行っている感じですね (CCB12 第 6 回調査)

(24) ~ (26) の例で示されるように、名詞をとりたてていて、かつ、共起がないものは「不自然」と判定されているが、ではどのように使用されれば「自然」になるのか、この点については次節にて分析を行う。

次に、先行研究で「使えない」と指摘されていた、「ただ N だ」のような名詞述語文は、以下の 3 例が見られた。

- (27) 音楽はほんとに自分は楽器とか、ピアノは少しだけ、できますけど、でもただ初心者です (CCB13 第 7 回調査)
- (28) インタビュアー：どんな湖なんですか  
 協力者：別なことが {笑} ありません<sup>10</sup>、ただ {笑} 一般の {笑} 一般的な湖です (CCB10 第 1 回調査)
- (29) 卵のトマトの卵炒めとかそしてセロリとか白菜とか、そしてスープとか、とっても簡単、の料理たぶん料理も言えないですただ、ただ食べ物です (CCB13 第 7 回調査)

これらの 3 例は全て「不自然」と判定されており、先行研究と一致する結果となった。

さらに、形容詞をとりたてているものは全出現数 113 例のうち 1 例しか見られなかったものの、母語話者 4 名全員がその 1 例を「不自然」と判定した。実際の出現は以下の通りである。

- (30) つまり、あなたは頭がいいけど、ただ頭がいい、良くのは、駄目で、足りなくて、良い人

<sup>10</sup>「別なことはありません」は「特別なことはありません」の意味であると考えられる。

間になるためには、IQだけではなく、重要だと教えてくれました。(CCB07 第8回調査)

先行研究では、形容詞をとりたてる際には副助詞「だけ」を要求する傾向にある、という指摘があるが、(30)も「だけ」の共起はなく、それが不自然と感じる一要因となったことが推察される。

次に、動詞をとりたてているものをみると、動詞をとりたてているものの全出現は23例あり、そのうち母語話者4名全員が「不自然」と判定したものは5例(21.74%)であった。4.1では母語話者は主に動詞をとりたてていたが、動詞をとりたてる場合においても、使用によっては「不自然」と感じられる使用もあるということが、これにより明らかとなった。では、動詞をとりたてる際に「不自然」と感じられてしまう使用とはどのような場合なのであろうか。分析の結果、「不自然」と判定された5例に共通して見られた特徴としては、4.1で挙げられたような共起がないという点であった。以下に実際の出現例を示す。

- (31) ただ先生が立って話す授業もあって、グループ分けてある特定なテーマについて相談してそして発表する授業もあるので、やはり、話す機会が多い授業がいいと思います (CCB07 第6回調査)
- (32) 毎日はただ一つ一つとても綺麗な場所を探して、そして、高い給料がもらえる [笑] 本当に、素晴らしい人生だと思います [笑] (CCB17 第7回調査)
- (33) その時は、何も考える<sup>11</sup>、ただ、毎日、毎日、外で、遊びで、とても一楽しいです 都会、都会は、便利だから都会、都会は一便利一だから、でも一、ほしい物は、たくさんでっすとても、私のとって、厳しいでっす (CCB17 第1回調査)

(31)～(33)に見られるように、「不自然」と判定された5例は全て限定副詞や副助詞「だけ」、比較表現、とりたてる範囲の限定の否定、範列的關係にある範囲の限定の否定の、とりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティの共起がない。よって、動詞をとりたてる際にも上記に示したような共起がない場合には「不自然」とされる可能性があると思われる。この点については次節でさらに詳しく分析を行う。

#### 4.3 母語話者4名の修正が一致したもの

ここでは、4.2の結果について、さらに詳しく分析を行うために、4名全員に「不自然」と判定され、かつ、4名全員の修正が一致したものについて分析した結果を示す。4名全員の修正が一致するということは、「使用の制約」がより具体的に明らかになると思われるためである。

分析の観点は4.2同様に、とりたてている語の品詞、および共起、加えて、「ただ」が削除されているか否か、について分析を行った。

<sup>11</sup>「その時は、何も考える」は「その時は何も考えていなかった」の意味であると考えられる。

表4 4名の判定者全員の修正が一致したもの

とりたてている品詞	一致した修正数	「ただ」が削除されたもの	副助詞が加えられたもの
名詞	20	20	だけ 18
			しか 2
動詞	2	0	だけ 2
			しか 0
形容詞	1	0	だけ 1
			しか 0
計	23	20	23

表4を見ると、不自然と判定したものを自然な形に修正した結果が4名全員一致したものは、23例あった。まず、最も多かった修正は、名詞をとりたてている場合における修正で、20例が見られた。修正内容を見ると、20例全てで「ただ」が削除されて副助詞が加えられていた。なお、加えられた副助詞の種類では、「だけ」が18例、「しか」が2例であった。以下に実際のそれぞれの修正例を示す。まず、「だけ」の例を示す。下線部が修正対象部分である。

- (34) みんなにとってはみんなが生まれた頃は地位もお金も家族も全然異なっていますが、ただお金ただ時間はみんなにとっては公平なことです (CCB14 第8回調査)  
→ (修正後) お金と (や) 時間だけは
- (35) 私選びたい仕事はただ興味がある仕事です (CCB17 第6回調査)  
→ (修正後) 興味がある仕事だけです

以下の2例は「しか」を用いた実際の修正である。下線部が修正対象部分である。

- (36) 最後の大学入学試験はただ百八点取りました ほんとにあの時から数学に全然興味とかもないしそして、自信もないし、なんでもないです (CCB10 第5回調査)  
→ (修正後) 最後の大学入学試験は百八点しか取れませんでした
- (37) そして、日本語、中国には日本語の、教育、日本語の授業がある学校、たぶん、ただ都会にあります (CCB07 第3回調査)  
→ (修正後) 都会にしかありません

4.2において、名詞をとりたてている「ただ」で、共起のないものは「不自然」と判定されたものが多く見られ、助数詞の共起があったとしても「不自然」と感じられていた。しかし、この「不自然」と判定された理由は、共起があるかないかで「不自然」と感じられたというよりも、対話場面において名詞をとりたてる場合には、母語話者は一般に「ただ」は使用せず、限定を表す副助詞を用いることのほうが自然であるために「不自然」と感じたということが強く示唆される結果となった。工藤(2000)では、副詞はもっぱら用言またはそれ相当の語句を修飾(限定・強調)することが基本的な機能であることが指摘されているが、母語話者は副詞「ただ」につい

でも、用言以外をとりたててことに違和感を覚える可能性があると思われる。4.1において、母語話者が「ただ」で名詞をとりたてている例も見られたが((16), (20))非常に数も少なく、(16)では範囲の限定の否定「ない」を、(20)では助数詞「人」と共起していた。よって、母語話者は、非常に限られた場合にのみ、「ただ」で名詞をとりたてている可能性がある。

その「限られた場合」について分析を行うため、以下に「ただ」で名詞をとりたてているが4名全員が「自然」と判定した全4例を示す。

- (38) スープではありません、スープではありません。そして、何と言うか、水ではありません。  
ただ、ただ麺をだけ (CCB13 第2回調査)
- (39) 何特別なルールとかないんです。絶対食べる食べ物もない。ただケーキだけ、食べます  
(CCB13 第6回調査)
- (40) わあし<sup>12</sup>は、ただ普通の一、普通の一、せんじゅう<sup>13</sup>です [笑] (CCB07 第3回調査)
- (41) あの先生は、最初はただ、学習のために勉強のために勉強します (CCB13 第6回調査)

(38) (39)は副助詞「だけ」の共起があり、かつ、前の文に「ありません」「ないんです」のように否定「ない」がある。(38)は、「ただ」でとりたててる語(麺)と範列的關係にある範囲の語をあらかじめ限定し(水)、それを否定している。よって、このような「範列的關係にある範囲の限定の否定」がある場合で、かつ「だけ」の共起がある場合には、「ただ」で名詞をとりたてることが可能であることが示唆される。

一方の(40)(41)は「だけ」や否定の「ない」の共起はないが、「ただ学習のため」「ただ普通の選手」という出現で、2つに共通して助詞「の」が出現している。よって、助詞「の」が「自然」と感じる要因になっている可能性があることが示唆される。実際に、母語話者の使用で名詞をとりたてていた使用の(20)の文でも、「ただ一人の創造的天才」と助数詞「人」に加えて、助詞「の」が共起している。

この助詞「の」の共起についてであるが、学習者の使用で母語話者4名全員が「不自然」と判定した(27)～(29)の例は、「ただNだ」のような名詞述語文であったが、(27)～(29)は全て「ただのNだ」と助詞「の」を加えることで連体詞「ただの」になり、自然な使用となる。例えば、(27)は「ただの初心者」(29)は「ただの食べ物」とすることで自然な使用となる。よって、名詞をとりたてた際には、助詞「の」が共起することで「自然」と感じられる一要因となっている可能性がある。しかし、この点についてはさらにデータ数を増やして分析していく必要があると思われる。

次に、動詞をとりたてている場合であるが、4名が一致した修正2例は、「ただ」は削除されず、副助詞「だけ」が加えられていた。実際の修正例は以下の通りである。

- (42) 私はあまり研究が好きではないです。以前は自分が研究生になったただその国の自然とお

<sup>12</sup>「私」の意

<sup>13</sup>「選手」の意



金を無駄になるだと思います (CCB17 第6回調査)

→ (修正後) ただその国の自然とお金が無駄になるだけだと思います

- (43) ただ先生が立って話す授業もあって、グループ分けてある特定のテーマについて相談してそして発表する授業もあるので、やはり、話す機会が多い授業がいいと思います (CCB07 第6回調査)

→ (修正後) ただ先生が立って話すだけの授業

4.2において、「ただ」が、動詞をとりたてている場合にも、何らかの共起表現が必要とされる可能性が示唆されたが、(34) (35) の例をみると、「ただ」は削除され副助詞「だけ」が加えられている。一方で、4名全員が「自然」と判定した動詞をとりたてての例を見ると、以下のような例が「自然」と判定されている。

- (44) 実は私は今オタクになる感じなんですけど家に帰ったらただ寝たいんです (CCB12 第6回調査)

- (45) 将来の夢、と言えば、別にないんですけど、はい、ただ、いい男に、なれるように、する [笑] (CCB04 第5回調査)

- (46) はいそれはほんとに言葉の、力ほんとにほんとにあの日たぶん先生はあんまり悪いわるそん、ほんとに、悪い、ことも思っていない、ただ、こう言いました (CCB13 第7回調査)

- (47) ふろー、ふえーしえん<sup>14</sup>の、のー勉強ではなく、ただ、アニメを、見、たり、かんだんの、単語とお、挨拶と、勉強しました (CCB07 第1回調査)

(44) は「～たい」という、願望を表すモダリティがとりたてる語に付加して共起されており、(45)～(47)は「ただ」の前に「ない」が共起されている。よって、動詞をとりたてる際には、限定副詞、副助詞「だけ」、比較表現、とりたてる範囲の限定の否定、範列的關係にある範囲の限定の否定、とりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティ、といった表現を共起することで「自然」と感じられる可能性が示唆された。

また、形容詞をとりたてる場合であるが、4名全員の修正が一致したのは1例で以下の通りの「ただ」は削除せず、副助詞「だけ」を加える修正であった。

- (48) つまり、あなたは頭がいいけど、ただ頭がいい、良くのは、駄目で、足りなくて、良い人間になるためには、IQだけではなく、重要だと教えてくれました。(CCB07 第8回調査)

→ (修正後) ただ頭がいい、良いだけは、駄目で

4.2では元の(30)の文は副助詞「だけ」の共起がないために不自然と感ずることが推察されたが、修正された(48)では「だけ」が加えられており、4.2での推察および先行研究の結果と一致する結果となり、「ただ」が形容詞をとりたてる際には副助詞「だけ」の共起が自然である

<sup>14</sup>「プロフェッショナル」の意と思われる。

ということが推察される結果となった。しかし、形容詞についてはこの1例のみの出現であったため、「だけ」以外の共起についての分析ができなかった。よってさらにデータ数を増やして分析する必要があると思われる。

以上、学習者のコーパスデータを判断文とした母語話者の評価データの分析を行ったが、分析の結果をまとめると、以下のような場合に母語話者は「ただ」の使用について「不自然」と感じることが示唆された。

- ① 「ただNだ」のような形の名詞述語文
- ② 範囲の限定の否定「ない」や、範列的關係にある範囲の限定の否定「ない」、「ただ～の…」のような助詞「の」の共起がある、といったような限られた場合を除いた、名詞をとりたてる使用
- ③ 限定副詞、副助詞「だけ」、比較表現、範囲の限定の否定「ない」、範列的關係にある範囲の限定の否定「ない」、とりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティのような表現の共起がない動詞をとりたてる使用

## 5. まとめと今後の課題

本稿においては、副詞「ただ」の対話場面における使用上の制約について、その一端を明らかにすることを目的として、母語話者のコーパスデータおよび母語話者による評価データを用いて詳細な分析を行った。それらの分析の結果、母語話者の、副詞「ただ」の使用に際して推察されたことをまとめたものは以下の通りである。

- ① 「ただ」が副詞として使用されることは少ない
- ② 動詞がとりたてられる傾向が強い
- ③ 動詞がとりたてられる際には、限定副詞類の「単に」「単純に」「ひたすら」や、副助詞「だけ」と共起する傾向がある
- ④ 比較表現、とりたてる範囲の限定を否定する表現、とりたてる範囲と範列的關係にある範囲の限定を否定する表現とも共起することがある
- ⑤ 「ただNだ」のような形の名詞述語文は不自然に感じられやすい
- ⑥ 限られた場合を除いて、名詞をとりたてる使用は不自然に感じられやすい
- ⑦ 限定副詞、副助詞「だけ」、比較表現、とりたてる範囲の限定の否定する表現、とりたてる範囲と範列的關係にある範囲の限定を否定する表現、「～たい」や「～てしまう」のようなとりたてる語に付加された話者の心的態度を表すモダリティ、といった表現の共起がない動詞をとりたてる使用は不自然に感じられやすい

また、今後の課題として残されたのは以下の点である。まず、本稿では「ただ」の対話場面における使用についてしか分析を行えなかった。よって、対話場面以外の中での使用についても今後分析を行う必要があると思われる。加えて、母語話者が対話場面において、「ただ」を副詞と

して使用する割合は他の品詞での使用に比べて少ないため、今回は母語話者の使用についてのデータ数が少なくなりました。よって、今後さらにデータ数を増やして、本稿においてとりあげた表現以外の共起傾向等についてもさらに詳しく分析していく必要があると思われる。そうすることで、副詞「ただ」の使用の制約についての詳細な分析を行うことができるであろう。

### 参照文献

- 相澤菜穂子・佐藤琢三 (2008) 「多機能語「ただ」の分析」『日本語文法』 8(1): 53-67.  
 安部朋世 (2004) 「単ニとタダ」『千葉大学教育学部研究紀要』 52: 155-160.  
 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』 163-234. 東京：岩波書店.  
 工藤浩 (2016) 『副詞と文』 東京：ひつじ書房.  
 呉慶霞 (2019) 「排他的限定を表す副詞の意味用法をめぐって」『日本語学会 2019 年度春季大会予稿集』 : 25-32.  
 鈴木靖代 (2019) 「中国語話者の限定を表す場面における限定副詞「ただ」の過剰使用に関する縦断的分析—とりたてて詞「だけ」「しか」の使用傾向との比較から—」, 中国語話者のための日本語教育研究第 46 回研究会, 発表資料, 日本・埼玉, 2019 年 11 月 30 日.  
 丁芳芳 (2010) 「限定副詞についての日中対照研究—排他的限定副詞「ただ」と“只”を中心に—」『指向』 7: 95-105.

### 関連 Web サイト

国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language; I-JAS)』 <https://www2.ninjal.ac.jp/jl/lsaj/ihome2.html> (2021 年 02 月 03 日確認)

## An Analysis of the Constraints on the Use of the Adverb *tada* in Dialog: Based on the Corpus of Japanese Native Speakers and JSL Learners

SUZUKI Yasuyo<sup>a</sup> FUSE Yuko<sup>b</sup>

<sup>a</sup>Project Collaborator, NINJAL

<sup>b</sup>Adjunct Researcher, JSL Research Division, Research Department, NINJAL

### Abstract

This study analyzes the constraints on the use of the adverb *tada* in dialogue based on the corpus of Japanese native speakers and Chinese JSL learners, as evaluated by Japanese native speakers. There are seven observations advanced about the constraints on the use of the adverb *tada* in Japanese native speakers' dialogue: 1) The word *tada* is not often used as an adverb in conversations. 2) It is most commonly used focusing on a verb. 3) When a verb is in focus, attributive adverbs such as *tanni*, *tanjyunni*, and *hitasura* and the adverbial particle *dake* tend to co-occur. 4) Comparative expressions and expressions that contradict the scope limitation also tend to co-occur. 5) Noun predicate sentences like *Tada...da* feel unnatural. 6) The noun-focused use feels unnatural, with exceptions. 7) The verb-focused use without co-occurring expressions feels unnatural.

**Keywords:** attributive adverb, adverbial particle, corpus of JSL learners, I-JAS, B-JAS